

村上春樹「パン屋再襲撃」の批評性

——グローバリズム化へのレリーフ——

一 はじめに

高橋 龍夫

村上春樹の「パン屋再襲撃」(『マリ・クレール』一九八五・八)は、短編集『パン屋再襲撃』(文藝春秋社 一九八六・四)の表題作で、その巻頭に置かれた作品である。一九九二年にはアメリカで英訳され、翌年、短編集『The Elephant Vanishes』(Alfred A. Knopf 一九九三)にも収録された。短編集刊行後には、日本の同時代評¹⁾で取り上げられ、さらに、国語教育での実践報告もされた。以後も、村上春樹の短編作品の中では、比較的言及される機会の多い作品である。

「パン屋再襲撃」では、語り手の「僕」によって、約十年の時を隔てた二度のパン屋襲撃の事件が語られる。一度目は、「僕」が「相棒」と街のパン屋を襲撃するが、そこで得た「呪い」が自らの転機となってしまうパン屋襲撃体験であり、二度目は、約十年後、結婚直後の妻に先導されてマクドナルドを襲撃し、予定調和的な成功によって結婚生活に安住していくパン屋再襲撃体験である。

同時代批評や従来作品論で指摘されているように、この作品は、一九七〇年安保後の全共闘運動世代の社会帰属

の行方と、八〇年代の高度資本主義社会における均質的な社会の到来を寓意しているといえる。「僕」が二度の襲撃を試みながらもそれぞれ労働や結婚制度に馴致されるのは、森本隆子が指摘するように、「高度資本主義社会が、あくまでもソフトな管理社会の体裁をと」るからであり、「欲望の自己増殖と大量消費をモットーとする消費社会は、見せかけの差異を仮構することで個性のリアルさを演出しながら、実は均質性と同質性において閉じようとするシステム」だからであろう。田中実^①は、この作品を「納屋を焼く」(『新潮』一九八三・一)とともに「現実」のなかで自己を失うアイデンティティの崩壊を描いた小説」と規定し、「アイデンティティの解体化と回復の希求とが裏腹の形で一つの可能性として潜んでいる」と結論づけ、読者も両端の揺れのなかにいるのではないかと提起する^②。一方、石倉美智子は、結婚制度に則る「妻」が、共同の行為を通じて夫婦という関係を確かめ合うため「スムーズに儀式を遂行」しようとマクドナルドをターゲットにしたとし、その結果、「妻」と「僕」は「それぞれがそれぞれの、勝手な安堵に浸っているだけ」という「現代の男女の風景」を作品に見る。いずれも、「ソフトな管理社会」に取り込まれた現代人の主体性の喪失や他者との関係性の形骸化など、現代社会の様相を作品から読み取っているといえる。

だが、これまでの言及では、なぜ「僕」が十年前のパン屋襲撃ではワグナーの『タンホイザー』と「さまよえるオランダ人」の序曲によって「呪い」にかけられ、十年後の再襲撃ではマクドナルドのビッグマックを食べることで「海底火山」が見えなくなり「満ち潮」に身をゆだねるイメージへと回収されることになったのか、そのメカニズムについて具体的にアプローチしている論はない。村上春樹の作品には文化的記号性がディテールとして施され、読み解くキーワードとして無視できない場合が少なくない^③。その点でいえば、ディテールとしてのワグナーとマクドナルドが、いずれも他のクラシック音楽やファーストフード店では置き換え難い特質を帯びた記号として作品内で機能していると思われる。それは、あくまでも遊技性の素振りを意匠としてまといながら、他とは交換不能な記号的ディ

テールとして機能しているといえる。いわば、遊技性とシリアスさとを表裏一体に備えた記号的両義性を表象しつつ、同時代読者との共犯関係の構築を促しているのである。にもかかわらず、「パン屋再襲撃」には、九〇年代以降に通じる作品の批評性が見え隠れしているのではないだろうか。まずは、ディテールの記号性に着目することにより、テキストへのアプローチをはかりたい。

1

最初に、テキストの叙述をもとに、その構造を確認しておく。

パン屋襲撃の話を書いたことが正しい選択であったのかどうか、僕にはいままって確信が持てない。だぶんそれは正しいとか正しくないとかという基準では推し量ることのできない問題だったのだろう。

冒頭でこう逡巡する「僕」の語りは、妻とのマクドナルド襲撃が既に過去の出来事であることを読者に開示する。当時「二十八か九」だった「僕」は、結婚から二週間目の深夜の空腹感を契機に十年前のパン屋襲撃の話を書いたが、その是非について「僕」にはいままって確信が持てない（傍点、筆者）のだという。語り手の「僕」にとって、「不条理性」を帯びた過去へのわだかまりが、再襲撃の話を「人々」に語らせようとする与件になっていることには注意していいと思われる。

本作品が女性誌に掲載されたことを考慮すれば、冒頭に奇異な出来事への省察を布置することで、読者に謎解きへの関心を喚起し、以後の叙述への興味を持続させようとする作者の小説技法が作用していることは想像に難くない。しかし、そこには、結婚生活の時間を重ねてきた現在の「僕」の精神風景がおぼろげながら浮き彫りにされている。過去の事件が、現在の「僕」を少なからず規定している事態に対し、何か軽い遺恨のようなものが冒頭の「僕」の語

りに反映されているのではないか。

そしてもしその事件が人々の目に奇妙に映るとすれば、その原因は事件を包含する総体的な状況存在の中に求められて然るべきであろうと僕は考える。しかし僕がどんな風に考えたところで、それで何かが変わるというものではない。そういうのはただの考え方に過ぎないのだ。

現在の「僕」にとつて、不可逆的な過去を現時点から解釈するには「総体的な状況存在」という視点に依るしかない。しかも、それを「どんな風に考えたところで」現在の自分の状況は変化しえない、という無力感をも「僕」は自覚している。ゆえに、「僕」は過去解釈を「ただの考え方に過ぎない」と、あらかじめ主観的見解に自ら回収してしまふ。

こういった「僕」の過去に対する軽い遺恨のようなものは、大杉重男のいう「喪失の自覚の隠喩」ともいえよう。大杉は「村上の記号性は喪失の自覚そのものが喪失という事件を遡及的に捏造することにおいて成立する」とし、「『パン屋再襲撃』に収められた短編群が異口同音に語るのは物語の喪失についての物語である」と指摘する。^⑧ 実際の現在の「僕」は、「妻」との関係がまったく語られておらず、読者に唯一明かされているのは、未だに気がかりとなつているパン屋再襲撃という過去の「物語」によつて、現在の「僕」になにか「喪失の自覚」が生起しているという点だけである。仮に「妻」との平和で幸福な暮らしに充足しているならば、過去の事件の是非を未だに「正しい選択であったのかどうか」などとこだわる理由はない。

ちなみに、妻に話した「もう十年も前」のパン屋襲撃においても、パンとワーグナーを交換した体験後に生じた精神的変化を、「僕」は次のように語っている。

そこに何か重大な間違いが存在していると我々は感じたんだ。そしてその誤謬は原理のわからないままに、我々

の生活に暗い影を落とすようになったんだ。(中略) それは疑いの余地のなく呪いのようなものだった。

この「呪い」を契機に「いろんなことがその事件を境にゆつくりと変化」し「相棒」と別れた「僕」は、「大学に戻って無事に卒業し、法律事務所働きながら司法試験の勉強をした、そして君と知りあつて結婚した」という十年の歳月を送る。それまで、大学にも通わず「働きたくなつてなかった」という「僕」は、「鏡」(『トレフル』一九八三・二)に描かれる「僕」と同様、既存の社会制度に帰属しないアウトサイダーの意識でいたはずである。その時期に到来した「飢え」の感覚は、物理的に豊かな社会の中で、いわば人間の原始的・生理的欲求としての生存の根源を自覚しうる唯一の機会であつたともいえる。「その当時我々は食べものを手に入れるために実にいろんなひどいことをやったものさ」と語るように、襲撃を思いついたのは、制度に絡み取られない自己存在を自力で支える主体的な生への渴望の証ともいえ、同時に、それ自体、社会制度への反抗的姿勢を意味していたといえよう。

ちなみに、作者が襲撃先をパン屋に設定したのは、当然ながら『新約聖書』にあるイエス・キリストの言葉「人はパンのみにて生きるにあらず」(マタイによる福音書四章四節)のパロディーを意図してのことであろう。最低限の生の欲求の充足(「パンのみにて生きる」こと)が満たされない状況にある二人が、文字通り「パン」を求めてパン屋を襲撃する設定には、ユーモアとしての記号的遊技性すら感じられる。

しかし、田中実が「一九七〇年の安保、全共闘運動をモデルにし、それから十年後、全共闘運動の行方を描き出している」と指摘するように、パロディーを取り入れた記号的遊技性とは裏腹に、二人が大学に通わず労働も拒否した背景には、一九七〇年安保闘争における全共闘運動の影が色濃く宿されている。作品の時間構造から見ても、冒頭の「僕」の語りを作品発表時の一九八五年と想定すると、マクドナルド襲撃は少なくとも数年前の八〇年代初頭か七〇年代末頃の出来事となり、その十年前のパン屋襲撃は、ちょうど一九七〇年前後の事件ということになる。この時間

設定には、右のような必然的な問題意識が介在していたはずである。

ところが、アルバイトさえ拒絶する強固な信条を抱いていた「僕」は、パン屋襲撃事件による「呪い」を契機に、あたかも思想的に転向したかのように社会制度に従属していく二十代に変貌する。現在の「僕」は、既に司法試験をパスしていることも推定され、結婚した三十代以降の「僕」は、より体制や制度に従属した存在と化したといえよう。

こうした社会制度へコミットしていく二十代以降の変化について、十年後の「僕」は「妻」に対し「時代が変われば空気も変わるし、人の考え方も変わる」という一般論で片づけようとする。現在の「僕」は先述したように、過去の遺恨を抱きつつも「総体的な状況存在の中」にその要因を求める状況論的視点に自閉する。八〇年代半ばにはすっかり社会制度に帰属してしまった「僕」には、一般論や状況論を持ち出して自己完結する余地しか与えられていないようにさえ映る。

とはいえ、かつての「僕」が「妻」に向けてパン屋襲撃のことを「思わず口に出し」てしまったように、八〇年代半ばを生きる現在の「僕」は、過去の出来事の是非をめぐる逡巡を、今度は「人々」（＝同時代の読者）に向けて語らざるを得なかったのではないか。一般論や状況論的視点に回収しようとする「僕」の語りの中には、実は「呪い」の核心を示唆する記号的表象が読者に向けてキーワードとして発信されていると思われる。それが、パンと交換したワグナーであり、ビッグマッグを提供したマクドナルドということになろう。

2

まず、十年前のパン屋襲撃について検討しておきたい。なぜパンとワグナーとの交換を契機に、「僕」は「呪

い」にかかり、転向と思えるほどの変貌を遂げてしまったのか。

「パン屋再襲撃」には、先行する「パン屋襲撃」(『早稲田文学』一九八一・一〇)という作品があり、映画化もされた。^⑩内容的には、「僕」が「妻」に語ったパン屋襲撃の話と酷似している。だが、「五十すぎの共産黨員」という設定のパン屋の主人が「僕」と「相棒」に聴かせるワグナーの曲目は『トリスタンとイゾルデ』であり、「パン屋再襲撃」における『さまよえるユダヤ人』と『タンホイザー』の序曲とは異なっている。

パン屋を襲うことと共産黨員を襲うことに我々は興奮し、そしてそれと同時に行われることにヒットラー・ユーゲント的な感動を覚えていた。

パン屋を襲撃する行動が「ヒットラー・ユーゲント的な感動」^⑪と喩えられる「パン屋襲撃」では、「僕」と「相棒」の心境は、いわば虚無を抱え体制側の組織に参与しようとするナチ予備軍のような立場を自認しているともいえる。

襲撃しようとした店内には時間をかけてパンを選ぶ客の「オバサン」がいるが、パン屋の主人はかまうことなくワグナーに耳を澄ませている。

共産黨員がワグナーを聴くことが果たして正しい行為であるのかどうか、僕にはよくわからない。

オバサンはクロワッサンと揚げパンをじつと眺めつづけていた。何かがおかしい。不自然だ。クロワッサンと揚げパンは決して同列に並べてはならぬように思えるのだ。ここにはなにかしら相反する思想がある、と彼女は感じたようだった。

ここでは、共産黨員とワグナーの取り合わせが、「オバサン」の行為を見る「僕」の視線に「相反する思想」としてアナロジカルに投影されている。ここで注目したいのは、明らかにワグナーが共産黨員と対置される形で記号

的に表象され、「相反する思想」として意識的に導入されている点である。

後続の「パン屋再襲撃」のほうでは、ワーグナーの思想性は語られていない。しかし、先行する「パン屋襲撃」からは、パン屋の主人にワーグナーを聞かされる設定が継承され、しかも、あえて『トリスタンとイゾルデ』から『タンホイザー』と『さまよえるオランダ人』の序曲に改変された点からすると、「パン屋再襲撃」におけるワーグナー、および二つの序曲の記号性を検討しておくべきではないか。

「比類ない麻酔力」¹²「デモニーシシュな力」¹³などと評されるされるリヒャルト・ワーグナーの音楽は、周知のように、歴史的には、ヒトラーによって反ユダヤ主義に利用された。その危険性を、ナチ支配以前に批判したのは、ワーグナーの心酔者トーマス・マンであった。

ワーグナーの芸術は、それがどんなに詩的に、どんなに〈ドイツ的〉に見えようとも、それ自体きわめて近代的な芸術、必ずしも素朴でない芸術である。つまり、賢明で巧妙であり、憧憬にあふれていて狡猾である。感覚を麻痺させる手段特性と知的に目覚めさせておく手段特性を、享受者にとってはとにかく始末におえないやり方で合致させるすべを心得ている。¹⁴

マンのいう「感覚を麻痺させる手段特性」を備えたワーグナーの音楽が聴衆に与える恍惚感とは、「パン屋再襲撃」における「僕」と「相棒」にも少なからず作用したはずである。

主人はそんなこと（＝労働）は要求せず、ただ単にワーグナーのLPを聴きとおすことだけを求めたんだ。それで僕と相棒はひどく混乱してしまった。ワーグナーが出てくるなんて、当然のことながら我々はまったく予想しちやいなかったからね。それはまるで我々にかけられた呪いのようなものだった。（括弧内、筆者注）

ワーグナーの音楽は、空腹で何事も浸透しやすい生理的条件にあった「僕」と「相棒」に、「呪いのようなもの」

として予想外の感化力を發揮する。これに関連して、かつて遠山一行は、次のように述べていた。

ワグネルリズムという音楽上の思想が、こんなにも多様な問題として人間の精神のあらゆる側面からみつくのは、もちろん、ワグナーという音楽家の恐るべき個性の力のあわれにちがいないが、同時にそれは、芸術上の近代という特殊な時代の運命の表現でもあるだろう。そういう意味では、ワグナーの音楽は（作者自身はともかくとして）時代の毒の最大の被害者であるかもしれないのである。¹⁵

ワグナーがこのように捉えられるのは、周知のように、その生涯がヨーロッパの近代国民国家の成立期と重なり、さらにその音楽がヒトラー政権下に利用されたためである。

ワグナーの足跡について、藤野一夫は次のように述べる。

ワグナーは、パリでの異郷体験を経て、サン＝シモン主義的なコスモポリタリズムを脱却し、「ドイツ的なもの」に目覚めたが、「故郷的なものへの愛」という意味でのパトリオティズムは、『オランダ人』以降の作品に色濃く反映されている。（中略）ワグナーは一貫して「想像の共同体」の中心にあつて、美的国家と文化国民の創造を通じて「ドイツ的なもの」の世界的普遍性を具現しようとした。¹⁶

ワグナーの生涯と並行するドイツのナショナリズムは、一八四八年革命前までは民衆側からの自由主義、民主主義運動として隆盛し、ワグナーもハインリッヒ・ハイネなどと社会改革を目指す青年ドイツ派と関わりを持った。しかし、革命鎮圧後は国家権力主導の保守主義路線となり、ドイツ統一へ向けて帝国主義へと至る。この変化を、ピーター・ヴィーレックは「いわゆるフランス・ユダヤ的な世界市民という思想から、反ユダヤ的ナショナリストへの急激な精神的变化を遂げたワグナー」¹⁷として、そのロマン主義的精神が後にナチスに利用される起源となったことを厳しく指摘している。もともと共和制を支持していたワグナーは一九四九年のドレスデン革命ではドイツを追

われたが、藤野が指摘するように、既にその前後には「国民」を生み出す文化的共同体の形成と結びつくパトリオティズムの反映された『さまよえるオランダ人』（一八四二）と『タンホイザー』（一八四四）の作曲を手がけているのである。

「パン屋再襲撃」の「僕」と「相棒」は、このようなワーグナーの精神的変貌を背景にした二つの序曲を、生産者として社会的役割を担うパン屋の主人からじっくりと最後まで聴かされている。とすれば、この二つの序曲は、社会のアウトサイダーとして生きようとしていた「僕」に、想像の共同体への帰依を示唆する「比類ない麻酔力」を秘めた音楽として作用し、いわば近代国民国家を支えるネーションへの誘引力として機能したと解釈できよう。ちなみに、全共闘世代の「僕」と「相棒」が国家的制度に絡め取られたのは一九七〇年前後だが、革命運動に関わったワーグナーが結果的に国民創出に寄与してドイツが国家統一を迎えるのは約百年前の一八七一年のことである。両者の動向は、ちょうど百年の時を隔ててパラレルな関係にある。

このように、社会帰属に背を向けていた二人がワーグナーの『さまよえるオランダ人』と『タンホイザー』の序曲を聴くという行為は、国民国家の体制側にやむなく回収されていく契機としてみることができる。「それははつきりと目に見える具体的な問題というわけじゃないんだ」「その誤謬は原理のわからないままに、我々の生活に暗い影を落とすようになったんだ」と当時を振り返る「僕」の感覚的印象は、まさに聴衆の感覚に訴えるワーグナーの音楽の特性とその背後に潜む思想性に「呪い」のように感化されたことを意味している。この後、結託していた「僕」と「相棒」が別れたのも、ネーションへの帰属によって国民という等質性を帯びてしまったためであろう。個々の理念や信条、意志を剥奪する国民国家という巨大なシステムは、同士としての協同意識を希薄にしたはずである。

こういった意味で、ワーグナーの『さまよえるオランダ人』と『タンホイザー』の序曲は、「パン屋再襲撃」にお

いて不可欠なディテールなのだといえよう。

3

次に、十年後の「僕」が、結婚二週間目の妻とマクドナルドを襲撃し、ビッグマッグを食べた行為について検討したい。

「妻」は、「僕」の十年前の事件の話を聞いて、「たしかに私はある種の呪いの存在を身近に感じつづけてきた」とい、「この呪いをとく方法」として、もう一度パン屋を襲うことを提案する。「僕」にとって「呪い」はネーションへの帰属を促すものだが、妻にとっては、「呪い」を意識すること自体、結婚生活を平穩に営むには不要な産物ではない。なぜなら、「妻」は、デザイン・スクールで「事務の仕事」という管理的なデスクワークに携わり、深夜の外食も「どこか間違ってるわ」と否定する「ひどく古風」な面をもつ、極めて常識的で体制的様相を帯びた女性として描かれてゐるからだ。

なお、「パン屋再襲撃」発表の約三ヶ月前、一九八五年五月には男女雇用機会均等法が成立している。既に労働に従事している新婚夫婦にとって、女性の雇用・労働条件が原理的には男女差別の撤廃として制度化されたことの意味は大きい。しかし、石倉が指摘するように、「妻」が「制度を信じている」⁽¹⁸⁾存在として「僕」に對峙しているとすれば、「僕」にとっては、「妻」が一労働者としてより制度的なものに依存する度合いの高い存在と化したことになる。これは、「僕」に對する「呪い」が、一層身近に切迫したことを意味しよう。「僕」にとって「妻」の存在は、十年前に「僕」をネーションへの誘引力を「呪い」としてもたらした「パン屋の主人」と同じ位相といえる。

もっとも、「我々」という表現に不審を抱く「妻」は、夫の過去にまつわる「呪い」を解消することで、結婚相手

の夫との関係性を透明なものとして新たに構築することを望んだといえる。二人の思い出を新たに構築したい欲求は、かつて「我々」の間で共有していた空腹感という生存の根源的欲求確保のプロセス（儀式）を夫婦間で共有することにあるだろう。だが、夫婦間の愛の確認ともいえる再襲撃の先は、深夜の都会で営業するファーストフード店のマクドナルドであり、十年前、個人経営を営むパン屋を襲撃したときとは似て非なるものであった。あたかも予定通りに準備したかのように襲撃用の道具類を持参し自らマクドナルド襲撃を提案する戯画的描写は、労働やネーシヨンといった制度的従属に疑いをもたない妻が直感的に選択・行動しうる象徴的描写とも受け取れる。襲撃先でも、マニュアル化した対応しかできない店員を脅しビッグマックを手に入れただけであって、店長はシャッターを閉めることの管理上の責任や帳簿上の問題を第一に気にかけるだけである¹⁹。

ちなみに、「僕」は店舗に非常警報装置がないことで、「ハンバーガー・ショップが襲撃されるかもしれないなんて誰も思いつかなかったのだろう」と語るが、実際には、アメリカではファーストフード業界の拡大につれて、店舗での犯罪発生率が増えていた。

安全装置は、ファーストフード店ではまず導入されないであろう。交差点や幹線道路の出口付近に店を置き、ドライブスルーまで作つたのは、客が利用しやすいようにするためだが、強盗にしてみれば、そのおかげですばやく逃亡できる。（中略）

ファーストフード店で強盗事件が起きやすいのは、二、三人しか店員がいなく、つまり、客が来る前の早朝か、閉店間際の深夜。真夜中をとうに過ぎた時間、店を閉めるのは、十六歳の店員ふたりと二十歳の副店長だけ、というような状況は多い²⁰。

マクドナルドをターゲットにした「妻」がこのようなファーストフード店の特質を直観的に把握していたとすれ

ば、日頃からマクドナルドに馴染んでいた典型的な大衆消費者の一人として捉えられよう。

アメリカから上陸したマクドナルドが日本で最初に開店したのは、一九七一年のことである。その後全国展開として急速に国内に店舗が広がり、一九七七年には初めてドライブスルーも採用された。五店舗で国内展開を開始した一九七一年のマクドナルドの年商は二億円だったが、三四七店舗となった一九八二年には、外食産業売り上げベスト一を達成し、「パン屋再襲撃」発表の前年の一九八四年には、四五七店舗で年商が初めて一〇〇億円を超えている。以後も年商を順調に伸ばし、一九九一年には八六五店舗で二〇〇億円を超え、バブル崩壊後の不況下でも売り上げを伸ばし、二〇〇三年には三五九八店舗、年商は四〇〇億円を超えた。⁽²⁾「妻」は、このような企業の販売商品の中で当時もっとも高価であったビッグマック（一九八〇年―九〇年、三百七十円）を三十個、店長に注文して作らせている。「妻」は、「マクドナルドはパン屋じゃない」と言い張った「僕」の言葉を退け、「人はパンのみにて生くるにあらず」における「パン」（＝生存条件）獲得のため、夫とともに十年前のパン屋襲撃を再演した。演技のように首尾よく再襲撃を成し遂げビルの駐車場に止めて空腹を満たす便宜的、合理的な儀式は、個人商店で焼かれたパンではなく、グローバリズムの象徴ともいえる商品ビッグマックによってであった。とすれば、襲撃後、夫婦で共有した生存欲求の飢餓感を満たすために二人がビッグマックを食べる行為は、いわば、世界中で業務拡大を狙い日本でも急成長してその頂点に立ったアメリカ・グローバリズムの先駆けともいえる外資系企業の代表的商品の支配下に置かれたことを意味しよう。そのことに何の疑念も持たないのが、はじめから体制的管理下にいた「妻」であり、その「妻」に促されて「海底火山」の消失と引き替えに「満ち潮」に身をゆだねるようになったのが「僕」である。ここには、個人の欲求に根ざした空腹も、企業がマニュアル的に準備したものによって便宜的に満たされる現代社会の夫婦生活のありようが見事に提示されている。いわばグローバリズムの支配下で充足させられた「僕」は、個人的欲求に根ざ

した主体性は封印（あるいは去勢）され現代に浮遊する存在と化した。こういった一連のプロセスに対し、僕がいまだにわだかまりを抱くのは、個人を無化していくネーションとグローバリズムに身を委ねてしまったことへの疑義が漠然と残存しているからといえる。それは個人では抵抗不可能な「総体的な状況」として自らを納得させるしかない八〇年代の状況の反照を物語っているように。

しかしながら、マクドナルドを襲撃し、ビッグマックを獲得した二人の行為の背後には、それだけでは済まされない問題が潜んでいるのではないか。

4

夫婦が襲撃したマクドナルドの店内には、最後まで眠り続ける「学生風のカップル」が描かれる。彼らはパン屋再襲撃を挙行した夫婦よりも約十年ほど若い。彼らは、夫婦の乗る中古車ではなく「赤いびかびかのブルーバード」で移動し、深夜営業のマクドナルドを利用している。かつて社会に背を向けた七十年代の「僕」とは大きく異なり、彼らは八十年代の日本社会に浸透したマクドナルドに既に学生時代から馴染んでいる。マクドナルドに代表される画一的、効率的な企業支配に順応した彼らは、周囲で何が起ころうとも、文字通り目覚めることはない。彼らの「野性」は、マクドナルド的なものに回収され、すっかり眠らされているといえる。その姿は、一九二〇年代に流行した映画『カリガリ博士』²³の原作者、カール・マイヤーとハンス・ヤノウイツがドイツ帝制の弾劾を意図して設定した、国家権力を象徴するカリガリ博士に操られる眠り男ツェザールの戯画的存在のようでもある。

こういった八〇年代の動向に対し、ジョージ・リッツアの『マクドナルド化する社会』²³の日本語訳が出版されたのは一九九九年のことである。その中で、リッツアは、二〇世紀の最後の四半世紀に世界規模で店舗を拡大したマクド

ナルドが世界中どこでも同じように展開する効率的業務と消費者とのマニュアル化した関係性を、近代官僚制になぞらえる合理性批判として問題視し、「効率性」「予測可能性」「計算可能性」「技術体系の進歩」の四要因から、「マクドナルド化は脱人格化をもたらす」と指摘した。

だが、リッツァは、既に一九八三年に、本書の体系化の先駆けとして、マックス・ウェーバーの合理性理論とマクドナルドに代表されるファーストフードレストランの成長とを結びつけた「社会のマクドナルド化」という論文を発表している。これは「パン屋再襲撃」の発表される二年前であり、リッツァのいう「マクドナルド化」による社会の合理化過程が既に一九八〇年代前半から進行し、問題視されていたことを意味する。とすれば、「僕」と「妻」がマクドナルドを襲撃しビックマックを獲得する事態も、リッツァのマクドナルド化批判の文脈の中で捉え直すことが可能だろう。

リッツァは、マクドナルド化による社会の合理化過程の要因の一つ——「予測可能性」の問題点について、「人々の多くが意外な驚きのほとんど存在しない世界を選択するようになってきている」と指摘する。これは、「妻」のマクドナルド襲撃劇が用意周到に敢行されたことや、「学生風のカップル」が店内で何が起ころうとも眠り続けている事態にあてはまる。また、「自己が閉塞した場所に閉じこめられ、自己の感情が管理され、そして精神が抑制される」という「脱人格化」批判は、マクドナルドを襲撃しビッグマックを食べた後に「僕」の「海底火山」が不可視化されるイメージと通底する。

リッツァは、レクレーションまで合理化された現代社会を「合理性から逃避するためのルートがおおむね合理化されている」とし、「合理性という鉄の檻のなかで生きる以外にほとんど、あるいはまったく方法がない」と指摘しているが、これも短編集『パン屋再襲撃』にある、社会の合理化のしわ寄せから老象と飼育係が檻の中で消滅してしま

う「象の消滅」(『文學界』一九八五・八)が想起される。「パン屋再襲撃」における「僕」と「妻」はマクドナルド化(Ⅱ世界の合理化)の象徴であるビッグマックで空腹を癒すことで現代に生存し続けるが、同時期に発表された「象の消滅」の老象と飼育係は、まさに「合理性という鉄の檻」の中で自ら消滅せざるを得ない(Ⅱ抹消された)存在ともいえる。「象の消滅」の語り手の「僕」が、電機メーカーの広告部に勤務し、「便宜的な世界」に生きることには半ば自覚的である点も「パン屋再襲撃」のテーマを参照しよう。

リッツァは、マクドナルド化は、二〇世紀を通して生起し拡張してきた合理性・官僚制のパラダイム、すなわち、形式合理性の原理を基盤とし工場システムと共通する合理化という点で「ホロコーストの文脈で論じうる強力な根拠がある」と警告する。ここで想起されるのは、「僕」が十年前のパン屋襲撃において「呪い」として感化されたワーグナーの音楽が、二〇世紀にはナチズムと結びつき、徹底した合理化の下で行われたホロコーストの一翼を担ったことである。国民国家と近代合理主義を軸に、ワーグナーⅡホロコーストⅡマクドナルド化という時系列的文脈が成立するとすれば、「パン屋再襲撃」の「僕」は、七十年代には、ホロコーストに連なるワーグナーの音楽によってネーション意識に呪縛され、八十年代には、「ホロコーストの文脈」にある合理化過程の頂点としてのマクドナルド化に呪縛されて、個としての飢餓感²⁶は現代社会に完全に飼い慣らされてしまったことになる。

実際、マクドナルド化がホロコースト的文脈と無縁でないのは、『ファーストフードが世界を食いつくす』²⁷のレポートによって実体的に知ることができる。これによれば、マクドナルドなどファーストフード店に肉を大量に提供する必要上、一時間に約四〇〇頭にもものぼる牛が殺され肉塊へとの「生産」されていくホロコーストまがいの牛肉生産工場の凄惨な内部事情が報告されている。もちろん、そこには、非人間的な扱いを強いられる従業員の苛酷な労働条件が介在していることはいうまでもない。また、『肉食が地球を滅ぼす』²⁸では、肉牛の大量生産工場の現状から

「牛は、もはや人間と共生する「家畜」ではなく、商業資本のもとで工場生産される「経済動物」とされ、食肉の大量飼育用穀物の確保のために地球規模で森林伐採が強行されていく実態も報告されている。もちろん、肉牛の短期大量生産のために生じた問題もここには密接に関わってくる。さらに国際環境保護団体グリーンピースは、二〇〇六年、肉牛飼料用の大豆を大量生産するためにアマゾンの熱帯雨林を開拓して森林破壊を加速させているマクドナルド社の実態を告発した。²⁷⁾マクドナルドにおける世界拡張の後景には、こういった極度の合理性に支配・管理された食肉生産のための「工場システム」が実体として控えている。

ちなみに、二〇〇三年にノーベル文学賞を受賞した『動物のいのち』²⁸⁾において、作者J・M・クッツェーは、彼が造形したエリザベス・コステロという小説家に、動物のおかれた現状——動物園、動物実験、工場飼育など——の問題を大学人や詩人たちと議論させている。その中で、コステロが、工場飼育され屠殺される現代の家畜動物を人間の歴史的事象であるナチスのホロコーストと対比して論じるがゆえに、彼女を囲む知識人たちの物議を醸し出す場面が描出される。クッツェーの手によるこの物語において、世界のマクドナルド化における生産合理化過程が単に人間の脱人格化をもたらしただけでなく、動物を含めた世界環境そのものを脱生命化していく地球的規模の危機的事態が念頭に描かれていることはもはや否定しがたい。²⁹⁾

このようにみると、空腹だった「僕」が「妻」とマクドナルドのビッグマッグを食べて充足し「満ち潮」に身をゆだねるイメージの後景には、ワグナーからホロコースト、そして環境問題に至る二十世紀合理化の過程の表舞台の頂点を享受し、近代国民国家と八十年代における高度資本主義システムのグローバリズム化に潜む実態に無自覚なまま安住し、その共犯者に自ら参与していくことを自ずと意味してこよう。夜明けを迎えるメトロポリスの一角で、「ヘソニー・ベータ・ハイファイ」の巨大な広告塔」を目にし、「長距離トラックのタイヤ音に混じって鳥の声」と

「FEN」からカントリー・ミュージック」を耳にしながらから安らぐ新婚夫婦は、まさに規格化され、アメリカ化され、近代合理化の頂点にあるマクドナルドに飼い慣らされた、マクドナルド化に収斂されていく八十年代の日本社会の消費者の位相に与する典型的なシナリオを演じている。

ここで改めて作品の冒頭に返ってみれば、あの「僕」の過去へのわだかまりには、無自覚にせよ、近代国民国家と資本主義グローバリズム体制に馴致されたが故の決して小さくない個人的喪失と社会的代償とが直観的に内包されているのではなかったか。だが、それを後戻りしてリセットすることはもはやできない。満ち潮のボートに安堵した「僕」は、ただただ「総体的な状況」の視点を自ら回収するような内向きの視線を反復するしかないのである。それは、二〇世紀を覆ったナショナリズムとグローバリズムの旋風が世界中を席卷しもはや個人レベルでは対峙しえない危機的状况を端的に物語る。個人の飢餓感ハネーションに回収され、夫婦の愛さえも、グローバリズムの旋風によってしか確認しえないことが、八十年代の発表されたこの短編には、記号性として刻印されている。

「パン屋再襲撃」は、十九世紀国民国家のシステムに呪縛され、その延長上にある二十世紀資本主義のグローバリズム化に馴致された状況下にある「僕」が、もはや個人では決定的な判断が下せない事態を、読者に向けてモノローグとして語った作品といえるだろう。

おわりに

村上春樹をロシアにはじめて出版したドミトリー・コヴァレーニンは「自分の登場人物たちをある状況のなかに置く。ただ、それだけ」であることが、ソ連崩壊以後のロシアにとって、村上春樹が広く読者に読まれる理由の一つだとしている。

たしかに、「パン屋再襲撃」も状況下の人物を何の解決もなく描く喪失の物語だといえよう。だが、近代合理性によるナショナリズムとグローバリズム下の不条理に対するわだかまりや違和感そのものを〈語る〉ことにこそ、意味があるのではないか。一九九〇年代以降、イギリスの「マクリベル裁判」をはじめとして、各国でアメリカを主導とする多国籍企業に対する市民レベルでの抵抗運動が広まった。マクドナルド化の背景には、第三世界の労働力搾取、世界規模の環境破壊、家畜の虐待など様々な問題が潜んでおり、近年、『ブランドなんか、いらない』、『ザ・コーポレーション』、『いのちの食べかた』などがそれらを告発している。ということは、八〇年代以降の世界情勢の大規模な変化の渦中において唯一手だてがあるとすれば、まずは「僕」のように状況下の違和感を〈語る〉ことではないのか。たとえモノローグであっても〈語る〉ことによって、暗黙のものがレリーフのように浮き彫りになり、少なくとも変化の可能性の布石にはなる。近代主義を批判し続け先年死去したイバン・イリイチの著書『生きる意味』を訳した高島和哉は、その「あとがき」で次のように述べている。

八〇年代以降のイリイチは、そうした問題（＝管理の強化）がいかにわれわれ自身の精神のありように深く根ざした問題であるかということを解明し続けた一方で、問題を克服するための処方箋を安易に指し示すことは控え続けた。（中略）しかしながら、問題を問題として自覚することこそが、実は、その問題の克服に向けた、もっとも大きな、そして、もっとも困難な第一歩なのである。³⁴

リッツァは、マクドナルド化を「非常に堅固な構造を生み出している高度に合理的な近代現象」³⁵だととして、八〇年代を近代化の完成期としている。近代文学が近代国民国家、及び資本主義の制度的形成とパラレルにあったとすれば、近代化の完成期の呪縛に絡め取られていく人間の姿を描く「パン屋再襲撃」は、完成期ゆえにそのシステム自体の陥穽に自ら陥りざるを得ない現代人の姿を合わせ鏡のように表象した小説として、近代文学の終焉を示唆する短編

の一つといえるのかも知れない。にもかかわらず、記号性を借りることで近代化における違和感をレリーフとして歴史化（相対化）しようとする「僕」の〈語り〉は、日本のみならず、翻訳を読む世界中の読者に向け「問題を問題として自覚すること」に通じ、それ自体、「近代化の完成期」に一石を投ずる批評性を内包しているといえよう。

注

- (1) 「The second bakery attack」(『Playboy』一九九二・一)
- (2) 三浦雅士「パン屋再襲撃 単身主義にも新局面」(『朝日新聞』一九八六・五・五)、青木はるみ「回転木馬のデットヒートパン屋再襲撃「致命的な死角」の魅力」(『週刊読書人』一九八六・六・一六)、志村正雄「村上春樹著『パン屋再襲撃』世界の終わったあとで」(『文学界』一九八六・六) などがある。
- (3) 鎌田均「村上春樹を高校生はどう読んだか」『パン屋再襲撃』(一九八八・八 第四一回日本文学協会国語教育部会夏期合宿)
- (4) 田中実「消えていく〈現実〉——『納屋を焼く』その後『パン屋再襲撃』」(『国文学論考』一九九〇・三→『日本文学研究論文集成46 村上春樹』若草書房 一九九八・一 所収)
- (5) 石倉美智子「夫婦の運命 1—村上春樹『パン屋再襲撃』論」(『文研論集』一九九二・二)
- (6) 例えば、高田知波は「近代文学研究者が知らなくて構わない文化領域など存在しない」(『日本近代文学』二〇〇五・一〇)で、「今日、村上春樹を論じる際に、作中に引用されている音楽や映画の記号性に注目することは常識になっている」と述べている。

(7) 村上春樹の短編に対し、同じようなアプローチをしている最近の論文には、津久井秀一「村上春樹「カンガ

ルー通信」論「女性の〈非在性〉をめぐる」(『宇大國語研究』二〇〇六・三)がある。

(8) 「春樹再襲撃」(『ユリイカ』臨時増刊 二〇〇〇・三)

(9) 注(4)に同じ。

(10) 山川直人監督・脚本『パン屋襲撃』(BEACH LASH 製作・配給一九八二)

(11) ヒットラー・ユーゲント(Hitlerjugend)とは、いうまでもなく、ナチスのイデオロギーをドイツの青少年に教育するために一九二六年にナチスによって設立された青年組織のことである。

(12) 高辻知義『ワグナー』(岩波新書 一九八六・二)

(13) 三富明『ワグナーの世紀』(中央大学出版部 二〇〇〇・一)

(14) 「非政治的人間の考察(原題『Betrachtungen eines Unpolitischen』S. Fischer 一九一八)」(小塚敏夫訳『ワグナーと現代』みすず書房 一九七二・九 所収)

(15) 遠山一行・内垣啓一編『ワグナー変貌』(白水社 一九六七・一)

(16) 三光長治・高辻知義・三宅幸夫監修『ワグナー事典 DAS WAGNER LEXIKON』(東京書籍 二〇〇二・三) 所収、項目「ナショナリズムNationalism」。

(17) ピーター・ヴィーレック(Peter Viereck)、『西城信訳『ロマン派からヒットラーへ ナチズムの源流』(原題『META-POLITICS:THE ROOTS OF THE NAZI MIND』Capricorn Books 1961) (紀伊國屋書店 一九七三・八)

(18) 注(5)に同じ。

(19) 厳格な制度によって従業員を拘束するマクドナルドの販売方針については、青木卓『マクドナルドの勝手裏』(技術と人間 一九九一・一一)などに詳しい。

- (20) エリック・シュローサー (Eric Schlosser)「榆井浩一訳『ファーストフードが世界を食いつくす』(原題『FAST FOOD NATION』, Houghton Mifflin Company, New York 2001) (草思社 二〇〇一・八)
- (21) 日本マクドナルド株式会社広報部編『優勝劣敗 日本マクドナルド20年のあゆみ』日本マクドナルド株式会社 一九九一・一二)、及び、G・リッツァ、丸山哲央編『マクドナルド化と日本』(ミネルヴァ書房 二〇〇三・一) による。
- (22) 原題『Das Kabinett des Doktor Caligari』(ローベルト・ヴィーネ監督、一九二〇 ドイツ)
- (23) George Ritzer 原題『The McDonaldization of Society』(Pine Forge Press 1993 新版一九九六)。邦訳は、正岡寛司訳『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部 一九九九・五)。
- (24) 『McDonaldization of Society』([Journal of American Culture] 6 一九八三)
- (25) 注(20)に同じ。
- (26) 中村三郎『肉食が地球を滅ぼす』(双葉社 二〇〇三・三)
- (27) これについては、グリーンピースインターナショナルのレポート『Eating Up The Amazon』(二〇〇六・4)に詳しい。また、これを受けて、二〇〇六年七月二六日付『グリーンピース・ジャパン プレリリース』では、「米国穀物商社大手カーギル社をはじめとするブラジル産大豆の取引業者は、二十四日、声明を発表し、アマゾンで新規に森林転換して生産される大豆の購入の二年間停止(モラトリアム)に合意した。」と報じている。(いずれも、グリーンピース・ジャパンのウェブサイトで <http://www.greenpeace.or.jp> に掲載。)
- (28) J. M. クッツェー (Coetzee) 森祐希子・尾関周二訳『動物のいのち』(大月書店 二〇〇三・十二)(原題『THE LIVES OF ANIMALS』1999. Princeton University)

(29) これに関し、拙稿「現代文学から動物環境を考える」(『東北学』九号 柏書房 二〇〇六・一〇)において、動物問題と文学との関わりを論じた。

(30) 沼野充義「ロシアの村上春樹——「モノノアワレ」から世界文学へ」(『文学界』二〇〇六・五)

(31) ナオミ・クライン(Naomi Klein) 松島聖子訳『ブランドなんか、いらない 搾取で巨大化する大企業の非情』(はちの出版 二〇〇一・五) (原題『No Logo』Picador USA. 1999. 12)

(32) ジョエル・ベイカン(Joel Bakan) 酒井泰介訳『ザ・コーポレーション わたしたちの社会は「企業」に支配されている』(早川書房 二〇〇四・一一) (原題『The Corporation The Pathological Pursuit of Profit and Power』Free Pr. 2004. 02)

(33) 映画の原題『UNSER TAGLICH BROT\OUR DAILY BREAD』(二〇〇五年、ドイツ・オーストリア制作、監督・ニコラウス・ゲイハルター、脚本・ウォルフガング・ヴィダーホーファー／ニコラウス・ゲイハルター) 日本では二〇〇七年十一月より公開。

(34) イバン・イリイチ、高島和哉訳『生きる意味——「システム」「責任」「生命」への批判』(藤原書店 二〇〇五・九)

(35) 注(23)に同じ。